

「第九」といえば年末の風物詩。12月も下旬となればほとんど毎日のようにどこかで「第九」が演奏されています。しかしこの習慣は日本独自のもの。1940年の大晦日、ドイツの指揮者ヨーゼフ・ローゼンシュトックが新交響楽団（現在のNHK交響楽団）と演奏した「第九」が、ラジオで全国に放送されたことをきっかけに、暮れの「第九」演奏が広まりました。海外では「第九」は音楽祭や新しいホールのオープンなど特別な機会にしか演奏されません。おそらく日本は世界一「第九」が演奏される国でしょう。

交響曲ってなんだろう？

ベートーヴェンは生涯に9つの交響曲を書きました。交響曲とはオーケストラのために書かれた長大な作品のこと。たとえば長編小説に第1章、第2章、第3章といった章立てがあるのと同様に、交響曲も第1楽章、第2楽章、第3楽章、第4楽章といったように各章にわかれています。交響曲の楽章の数は4つが基本。楽章ごとに速い曲や遅い曲、迫力のある曲ややさしい曲など異なる性格を持っています。

ベートーヴェン以前にも交響曲を書いた作曲家はたくさんいます。モーツァルトは40曲以上、ハイドンは100曲以上の交響曲を書きました。それに比べると、ベートーヴェンの9曲は少ない気がしますよね。

しかし、クラシック音楽の歴史のなかで、ベートーヴェンの9曲の交響曲は圧倒的な存在感を放っています。今も昔も世界中のオーケストラがくりかえし演奏していて、人気が衰える気配がまったくありません。

なぜ、そんなにもベートーヴェンの交響曲は偉大なのか。一言で答えるのは難しいのですが、それまでにない強烈な感情表現をオーケストラで実現したことがひとつの理由でしょう。聴く人の心をゆさぶる熱い音のドラマが作品に込められているのです。

「第九」ってどういう曲？

「第九」はベートーヴェンが書いた9番目の交響曲、つまり最後の交響曲にあたります。1824年に完成され、この年、ウィーンのケルトナー・トーア劇場で初めて演奏されました。演奏は大成功を収め、満員の客席はベートーヴェンを熱烈にたたえたといえます。指揮台にいたベートーヴェンは当時、すでに耳が聞こえなかったため、客席からの拍手に気づかず、歌手から客席を向くようにうながされて、はじめて聴衆の喝采に気づいて腰をかがめたというエピソードが残っています。

「第九」の最大の特徴は第4楽章に歌が入ること。通常、交響曲とはオーケストラだけで演奏されるものですが、この曲では最後の第4楽章になると、合唱と4人の独唱者が登場します。ここで歌われるのがシラー作詞の「歓喜の歌」。歌詞には「すべての人々が兄弟になる」という博愛の精神が込められています。

第4楽章では、それまでの3つの楽章で演奏されたテーマが引用されます。そのうえで、バリトン独唱が「友よ、このような調ではない！ もっと心地よい歌をうたおう」といって、「歓喜の歌」が始まります。まるで過去を振り返り、未来へと思いをはせるかのよう。理想主義に燃える芸術家の姿が浮かんできます。